「『ことばの力』を身に付ける

―急速に変化する世界だからこそ、立ち止まって考えよう」

日本教育大学院大・北川達夫客員教授

教育関連の仕事に携わる前は外務省に勤めていた。入省後 3 年間は外国語の勉強や研修などを受けつつ、雑用をこなした。雑用の中で唯一自分の判断を求められ、責任を任されたのが、部署内で回覧する新聞の切り抜きだった。最初は個々の記事についてしか考えられないが、ある日急に、自分が読んでいる記事が全体の中でどのような意味を持っているのかが見えてくる。後に自身が新人教育を担当して実感したが、新聞の切り抜きは新人教育としての意味合いが強い。新聞を丹念に読み、きちんと評価することで外交の専門的な仕事も大半は用が足りる。じっくりと世の中を知りたいときに、新聞は非常に役に立つ。

さて、フィンランドの教育について、日本では理想的なものとして扱われることが多いが、実際はそこまでよいものではないと感じている。日本とフィンランド、それぞれに一長一短がある。日本の教育は網羅的だが、フィンランドでは生徒に求める水準が低く、落ちこぼれを作らない。たとえば掛け算九九についても、原理がわかっていれば問題がなく、暗記の必要はないという考えだ。ＮＩＥについては、フィンランドでも熱心に進めており、全国的にメディア週間を設け、一週間全教科で新聞を使った授業をするなどしている。

現代社会では、新しい知識が重要とされているが、それは集団としての知識基盤ということだ。ビジネスの世界でもスタンドプレーは求められておらず、チームプレーが中心になってきた。知識基盤社会は一人の力では対応できず、情報の共有が求められることになる。大きく分けると⑴知識を共有し、皆で相談して解決する力、⑵必要に応じて情報を手に入れて、自分の経験と結び付けていく力の 2 つである。そうした力を測るため、周りと相談して知識を共有してもよいテストが出てきており、PISA でも 2009 年から導入し、2018 年からの本格導入を目指している。

今、社会には、大きな物語、大きな画を描く人間がいない。これまでは思想家、哲学者、政治家といった人たちが未来の様子を描き、人間のあるべき姿を語ってきた。現在の日本は震災や原発事故で大きな物語が必要とされているにもかかわらず、語るべき人が語らない。政党にとらわれないで、国の将来について議論する「未来委員会」というものがフィンランド国会には常設されている。大量の情報があふれる中、立ち止まって、大きな物語を語る場というのは、やはり重要だ。

皆でじっくりと大きな物語を作る、政治家ではなく一人ひとりが大きな物語を描くためには、⑴過去を知り、（2）現在を認識、叙述し、（3）未来を予測するという 3 つの段階が必要だ。学校教育は（1）が中心だが、（2）も期待されている。新聞は（2）に関する記述が多いが、（1）を踏まえている。これからどういう未来が描かれて、人間がどうあるべきか。新聞を教育に使う上で期待している。

この大会には新聞を活用することに熱心な先生が多く集まっている。子どもと一緒に、過去を知り、現在を認識、叙述し、未来を予測していく。子どもたちが日本の未来、世界のために、大きな物語を語ることができるよう、ご自身の活動に誇りをもって続けてほしい。